

日本美術院の五浦移転に関する一考察 —岡倉覚三のネットワーク構築と野口勝一の役割—

清水 恵美子*

はじめに

明治美術界に重要な位置を占める岡倉覚三（天心）が、福島県との境に位置する茨城県多賀郡大津町（現北茨城市）五浦海岸の土地を購入したのは、明治36年8月のことである。その翌年には渡米し、ボストン美術館での勤務を開始した。明治38年に米国から帰国した岡倉は、東京から五浦に住居を移し、以後大正2年に死去するまで、五浦とボストンという二つの拠点を往復する生活を続けた。

明治39年、二度目のボストン美術館勤務を終えて帰国した岡倉は、8月に日本美術院規程を改定し、美術院に第一部（絵画制作）と第二部（彫刻修理）を設けた。日本美術院は、明治31年、東京美術学校校長職を非職となった岡倉が、連袂辞職した画家、彫刻家、工芸家たちと、美術や工芸の研究、制作を目的に設立した団体である。規程の改定は、当時活動が停滞していた日本美術院再建のための布石であった。明治39年11月9日、横山大観、菱田春草、下村観山、木村武山は家族を伴って五浦に転居し、日本美術院研究所で新日本画創造を目指して研鑽を積むこととなる。

この日本美術院の五浦移転という出来事に、地域はどのように関与してきたのか、藤本陽子氏や後藤末吉氏の研究や、岡倉の「五浦時代」に関する研究を集約した五浦美術叢書『岡倉天心と五浦』から確認することができる¹。本稿ではこれ

らの先行研究を踏まえながら、茨城県出身の政治家、野口勝一に着目し、地域における岡倉と日本美術院の受容について、彼が果たした役割を考察したい。

1. 土地購入と野口勝一の紹介状

岡倉が五浦海岸を訪れたのは、明治36年4、5月頃とされている。その根拠となる資料には、彼に同行した多賀郡出身の画家（当時日本美術院研究会員）である飛田周山と、岡倉の長男一雄による回想がある²。周山も一雄も、ともに昭和十年代の回顧であるため、経路や旅行期間などに複数の相違が認められる。だが、二人とも景勝地を求めるといふ旅行の目的については一致している。周山によると、最初は平を訪れたが、彼の地の景観が気に入らなかったため、帰りがけに五浦に立ち寄った。そこは奇勝の海岸で、海に突き出た平台に多賀郡の実業家柴田稲作が建てた観浦楼が荒れ果てて放置されていたという。一目見るなり気に行った岡倉は、土地の購入を決め、周山の父親飛田正と「鳥居塚」という人物に買収を委託した。岡倉は、景勝の地を求めて常磐地方を訪れ、その過程で五浦を発見したのである。

しかし、肝心の土地購入はすんなりと運ばなかった。残された登記簿からその経緯を明らかにした後藤氏によると、求めた土地が岡倉名義になったのは、訪問からしばらく経った8月1日であった。当初、土地の所有者と買収の交渉はスムーズに進まず、何の進展も見られなかった。7

*お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター客員研究員

月に入ってから、観浦楼とその周辺の土地を飛田正と鳥居塚庄吉が買い取って登記し、その後、岡倉に土地を売却するという形でようやく決着がついた。土地買収が、土地の者の名義にしてから岡倉名義になるという、二段階の手順を踏んで行われたのである³。

では7月になって交渉が進展した背景には、何があったのであろうか。ここで、買収交渉が停滞していたと見られる6月6日に、飛田周山が岡倉のために、東京小石川の野口勝一を訪問したことに注目したい。



図1 野口勝一（1848-1905）

野口勝一は、五浦に近い多賀郡磯原村（現北茨城市）に生まれ、政治家、文人、ジャーナリストとして活躍した人物で、詩人野口雨情の伯父でもある。水戸藩郷士の家に生まれた野口は、自由民権運動に加わり、明治14年茨城県議員に当選、議長を務めた。明治16年上京して農商務省に勤務し、同25年には衆議院議員選挙に出馬して当選を果たした。一方、彼は『茨城新報』の幹事や、茨城日日新聞社の社長を歴任したジャーナリストでもあり、上京後は『東洋絵画叢誌』、『絵画叢誌』等の美術雑誌を編集、刊行している。このように、

野口の活動は政治面、文化面にわたり、その影響力は茨城県、福島県、中央政界に広く及んでいた⁴。

野口は、6月6日の周山の訪問について、日記に次のように書き残している。

飛田周山来（中略）夜応飛田請作為岡倉覚蔵紹介鉄伝七、石平一郎、長山重夫、小野新蔵、滝川淑人、野口量平書⁵。

（飛田周山来る。…夜、飛田の請に応じ岡倉覚蔵紹介の為、鉄伝七、石平一郎、長山重夫、小野新蔵、滝川淑人、野口量平に書を作る）

ここから、周山の依頼を受けた野口が、岡倉のために六名に紹介状を書いたことがわかる。

では、野口が紹介状を宛てた六名とはどのような人物だろうか。鉄伝七は、多賀郡大津町出身で、町会議員や県会議員を務めるとともに缶詰工業などの水産事業を開いた功績で知られる。石平一郎は多賀郡高萩村（現高萩市）出身で、製塩や呉服、雑貨などを商うかたわら、戸長を務めて県会議員に当選した。長山重夫は、多賀郡高鈴村（現日立市）の村長である。野口量平は勝一の実弟（雨情の父）で、北中郷村の村長を務めた。滝川淑人は量平の義理の甥にあたる。このように、紹介状の宛先は、五浦を擁する多賀郡の政治に参与していた地元の有力者および野口の親族であった。

ここから、五浦における野口の人脈と影響力を見込んで、周山が野口を訪問したことは明らかだと思われる。岡倉一雄は回想の中で「天心はますますその買取方を督促するのであった。しかし、なんぼ性急な彼の申し出でも、五浦の購入は一朝一夕のことにはいかなかった。地元有志の尽力で、まず観浦楼の買取が成功した」と記している⁶。一方、野口の日記には、飛田親子との会合や書簡の往復など、その親交を窺う記事が散見される。土地の交渉が難航し、岡倉から「督促」を受けたとすれば、飛田家が野口に相談を持ちかけることは自然の成り行きだったと考えられる。

さらに観浦楼と周辺の土地は柴田稲作の娘が所

有していたが、明治22年に建立された「柴田稲作記念碑」に撰文を書いたのは野口勝一に他ならない⁷。このような関係から、野口の紹介状が柴田の娘を動かす効力を発揮したことは想像に難くない。

周山の野口家訪問以降、土地買収が進展を見せたのは、野口の紹介状がこれに寄与して大きかったことを示唆していよう。こうして、岡倉の五浦の土地購入は、飛田親子、野口勝一、紹介状を受け取った有力者たちなど「地元有志の尽力」で「成功」した。この結果、岡倉は、地元多賀郡の有力者と知己を得ることとなったのである。

2. 岡倉覚三と野口勝一

しかし飛田親子と親交があったとはいえ、野口が面識のない人間のために、紹介状を即座に六通も書くであろうか。その疑問を解くために、明治美術界における岡倉と野口の関係についてここで確認しておきたい。

自由民権家、政治家として知られる野口だが、日本画の画法を記した書物『画法自在』を刊行するなど、美術研究家としても活躍していたことはあまり知られていない。『画法自在』の編集者大橋乙羽は、野口を「斯道有名の画学者」と評している⁸。

野口が文部省官僚だった岡倉と接点が生じたのは、農商務省入省後のことである。明治17年、農商務省主催の第2回国絵画共進会開催後、複数の画家の発議によって東洋絵画会が結成された。東洋絵画会は、農商務大輔品川弥二郎を会長に置き、絵画興隆や雑誌発行等を目的とした半官半民的美術団体である。このとき野口は、会の発足に奔走し、人事や事務所設置など体制を整えて、『東洋絵画叢誌』の創刊を実現した。同誌は明治19年6月まで発行され、野口は雑誌の編集を担当するとともに、ほぼ毎号に原稿を執筆した。

東洋絵画会が設立されると、岡倉も入会して学

術委員となった。だが、すでに龍池会、鑑画会という二つの美術団体に所属していた岡倉は、次第に美術教育や芸術的観点の主眼とする鑑画会を活動の中心に置くようになる。そのため、東洋絵画会における岡倉と野口との直接の交流は確認できない。

明治20年10月、岡倉は欧州美術視察旅行から帰国すると、東京美術学校創設の準備に着手した。当時、美術学校の教育方針をめぐる、日本式と西洋式のどちらにするかで論争が起きていた。同年11月、岡倉は鑑画会例会において、伝統的な日本美術の基礎の上に、西洋美術の技術や表現方法を摂取して新しい日本美術を創造する方針「自然発達論」を主張した⁹。

これに対して野口は、翌21年2月に論説「美術学校設立」を『絵画叢誌』11巻に発表した。その中で、日本画と洋画双方の教科を設けた方が「本邦固有ノ美術」を振興し「西洋絵画モ亦練熟スル」ことにつながると述べた¹⁰。野口の意見は、日本美術教育を軸に置く東京美術学校の基本方針に対立するものである。当時、岡倉の意図する日本画教育の方針は公には確定しておらず、日本画、洋画の学科を併置しようとする意見も重視されていた¹¹。このとき岡倉と野口は、東京美術学校設立をめぐる対立の渦中にあつたのである。

だが、野口は徐々に、岡倉の主導する美術運動に共感を示すようになっていく。明治24年、寺崎廣業らによって日本青年絵画協会が結成されると、岡倉は会頭に就任した。11月21日から3日間、上野公園内日本美術協会列品館で臨時研究会が開催されると、野口は会場に足を運び、『絵画叢誌』57巻に品評を執筆した¹²。そこで野口は「此の数の青年は将来我絵画の柄用を握り美術の盛衰に任すべきの人なり（中略）此絵の如きは軽々看過すべきものにあらざるなり」と述べ、出品作の多くを賞賛している¹³。野口もまた、次代の画家の育成を重視し、日本青年絵画協会が果たす役割に期待を寄せていたことが窺える。

さらに明治31年7月、岡倉を中心に日本美術院が創立されると、野口は8月に論説「日本美術院の設立」を発表した。

此院の設立は美術に益すること其れ幾許なるを知らず。従来此組織なきは美術上に対する大欠点なり。今日之れあるに至るものは時運と随伴し最も其宜きを得たるものなり。(中略) 此美術院の如く学校大に興りて官立と並立するの必要は是より益々生ずべきならん。此美術院の創起は実に此等の先駆をなしたるものなり¹⁴

野口は、官立以外の総合的な美術教育機関の必要性を説き、その誕生を歓迎した。そして日本美術院を創設した「諸子の勇と功とを賛美」し、将来の発展を祈念した。そこには日本美術院の設立趣旨に賛同する野口の姿勢が明確に表れている。



図2 野口勝一著『画法自在』博文館 明治31年

野口が岡倉の美術運動に理解を示すようになった背景には、岡倉と近い画家たちとの交流があったと考えられる。

野口の記事からは、彼が橋本雅邦、川端玉章、川崎千虎、久保田米僊、松本楓湖らと知己を得、

寺崎廣業や横山大観とも交流があったことがわかる。彼らはみな岡倉と強いつながりを持っていた。野口の知己には楓湖をはじめ、内藤耻叟、加藤桜老など、同郷である茨城県の出身者が多かったが、やはり彼らも岡倉とつながりを持っていた。このように二人の交流関係は、複層して重なり合っていた。このことが、野口に岡倉側の情報を入手する機会を与え、岡倉の美術運動に対する理解を深化させたことが推察できる。

重なり合う人脈の中でも、野口が明治32年5月に発行した少年読本『水戸烈公』の挿絵を、大観が描いていることに注目したい¹⁵。岡倉の五浦訪問の前に、野口と大観の間に交流があったことの例証となるからである。出版前の同年2月18日の野口の記事には、「横山大観来」と記されている¹⁶。おそらく野口宅で『水戸烈公』の挿絵について話し合いがなされたのであろう。

『水戸烈公』からは、幕末維新时期における水戸藩の功績を強調し、天狗諸生の争乱で失墜した威信と尊厳を復権したいという野口の思いが伝わってくる。大観はこの読本に、幼少時の斉昭、農民の人形に飯を供える斉昭など合計6枚の挿絵を描いた¹⁷。

大観は水戸藩士、野口も水戸藩郷土の家に生まれており、ともに天狗諸生の争乱が引き起こした大渦に翻弄されて成長期を過ごした。野口が『水戸烈公』の挿絵を大観に任せしたのは、大観の水戸人的要素との共鳴や、同じ経験を共有する同郷人としての共感があったからではないかと考えられる。また、前年岡倉に殉じて東京美術学校を辞職し、日本美術院結成に参加した大観に対する経済的援助の意味も含んでいたかもしれない。野口は同郷の若い画家に対して支援を惜しまなかったからである。

野口が支援した同郷の画家として、多賀郡関本村(現日立市)の佐藤暁関が知られている。暁関は、法律家を志して野口を頼って上京したが、寺崎廣業ら著名な画家に師事する機会に恵まれ、日

本画家の道に進んだ¹⁸。画家暁関の誕生には、美術界における野口の人脈が寄与して大きい。

こうした支援は、当然周山にも及んでいる。たとえば、明治32年1月の野口の日記には「竹内栖鳳書転送之飛田正、事係飛田之子正雄之件」とある¹⁹。竹内栖鳳から周山（飛田正雄）に関する書簡が届いたので父親の正に転送した、という記述である。周山は明治30年から栖鳳に師事していたが、この書簡は、野口が飛田家と栖鳳との間で仲介的な役割を担っていたことを示唆している。また、明治37年5月には、野口は美術出版社東陽堂を紹介することを周山に伝えている²⁰。日本青年絵画協会や日本美術院設立に賛同の意を表した野口は、自らも同郷の画家育成のため行動していたのである。

このような野口の活動や画家たちとの交流関係を考えれば、岡倉が、彼らを通して野口の人物像を聞いていたことが推察できる。また、野口にも当然岡倉の人となりは届いていたはずである。だからこそ野口は、岡倉のために紹介状を書くことを快諾したのである²¹。

3. 野口勝一のネットワーク

さて明治36年8月に土地の購入を果たした岡倉は、早速五浦へ移った。住居は観浦楼に風呂場を建て増しただけの状態であったが、サースピー姉妹や六角紫水らが訪れて宿泊した。その後、岡倉は10月に第15回日本絵画協会・第10回日本美術院連合絵画共進会の開催、11月に長女高麗子の結婚式、12月に長男一雄の米国留学などを経て、翌37年2月にはアメリカへ渡航する。

その一方で、岡倉は五浦の土地購入を続けた。11月には岡倉邸隣接地を新たに登記し、翌年1月には、後に日本美術院研究所附近となる土地を購入している。

岡倉が継続して土地登記を進めるなか、野口勝一は9月中旬から約1ヵ月帰郷し、県会議員選挙

に立つ鉄伝七を応援した。一度帰京した後、10月末に再び郷里に戻り、12月下旬まで滞在している。野口は11月6日実家を継いだ弟量平を訪ねたが、量平が重い病を患っていたため、東京の病院に入院させ、退院するまで磯原に滞在した。この時野口が書いた扁額が、野口雨情生家資料館館長野口不二子氏によって最近発見された。額の表には「観海」と篆刻され、剥落が激しいが、上部中心の玉を挟んで左右に二匹の龍が彩色されている。裏面には、勝一の整然とした文字で「観海亭」と呼ばれた野口家の歴史が記されている。

水戸威公之代慶安三年野口家祖不磷居士始賜食禄邸宅為郷士西山義公屢臨其邸賜親書観海亭号以為扁額後全家災祝融額亦歸烏有六世北水先生蒙文公殊遇公亦臨邸親書観海二字賜之



図3 扁額「観海」

(上：表面、下：裏面、部分)
野口雨情生家資料館所蔵

先生手自刻板掲諸相間此額是也

明治三十六年十一月 九世孫野口勝一謹識

これによると、先祖の野口勝親が水戸藩2代藩主徳川光圀より「観海亭」の号を賜わり、その後勝興が6代藩主治保から再び「観海」の二字を賜った。それを記念して曾祖父の勝興が篆刻したのがこの額だという。

その後、入院した量平は快復することなく、明治37年1月病没する。父祖が藩主から拝領した「観海」の伝来を記すことは、家督を譲った弟の快復を祈願するひとつの形だったのであろうか。牽強付会かもしれないが、野口が後世に残そうとした「観海亭」の名称と龍の絵は、岡倉の建てた「観瀾亭」（六角堂）や、『茶の本』（1906年）第1章の「双龍争珠」の描写一東と西は狂乱の海に翻弄される二匹の龍の如く、生命の宝玉を取り戻そうとむなしくあがいている一との間に、類似性が見出されて興味深い²²。

野口の帰郷中、岡倉との間に接点があったかどうかは確認されていないが、帰京直後には、後に日本美術院を支援する二人の人物と会っている²³。ひとりには飯村丈三郎である。自由民権運動を経て明治14年より県会議員となり、同23年に衆議院議員に当選、翌年に水戸の「いはらき」新聞社第二代社長となった人物である。野口は飯村のことを遅くとも県会議員時代から知っており、彼について「有才力」と評している²⁴。日本美術院の移転後、飯村は画家たちに揮毫を依頼するようになる。飯村の依頼を受けて、大観は《出山釈迦》（明治40年頃、絹本・彩色・軸装）を、武山は《義家勿来関》（明治40～41年頃、絹本・彩色・軸装）を制作している。

もうひとりには斎藤斐である。斎藤も、野口や飯村と同じように、自由民権運動に関わり、明治14年に県会議員となり、同25年に衆議院議員に当選した経験を持つ。明治31年から茨城農工銀行経営に携わり、同33年に頭取となった人物で、岡倉没後に大観らと日本美術院を再興する斎藤隆三の兄

である。明治34年11月農工銀行で紛議が発生した際、野口は斎藤のために調停を行っている²⁵。後に斎藤は弟の隆三、「いはらき」新聞社の佐藤秋嶺とともに「五浦会」を発足し、明治41年3月に水戸市常盤公園好文亭で開催された「五浦派」絵画展覧会では、作品紹介の労を執るなどの助言協力を行ったという²⁶。野口は彼らとの会話の中で岡倉のことを話題にしたこともあったであろう。

明治39年9月30日、「いはらき」新聞は日本美術院の五浦移転に際して「五浦は最早や単なる茨城県の五浦日本の五浦にあらずして実に東洋の五浦として世界の注目を惹くに至るべし」と報じて歓迎した。移住した大観、武山が茨城県出身であったことに加えて、かねてから岡倉と「いはらき」新聞社との間にはつながりがあり、それが日本美術院の歓迎につながったという²⁷。これは、茨城における岡倉の人脈が、転居した五浦周辺だけでなく、水戸に広がっていたことを意味している。それが地元メディアによる歓迎の言論形成に投影されたと言えるだろう。

日本美術院移転の翌年、明治40年9月22日には五浦の岡倉邸で、仲秋観月園遊会が催される。当日は、東京から画家、評論家、新聞記者などが多数訪れて大盛況であった。観月会には県内からも招待客が訪れた。「いはらき」新聞は、この日水戸から「波多野惇、猿田浩太、秋元洗二、堤孝三郎其他の諸氏」が参加したことを報じている²⁸。彼らはいずれも医師であり、県や水戸市の医学界の中心的存在であった。近世から地域の文化的発展を支え、比較的経済に恵まれた医師たちが、日本美術院を何らかの形で支援していたことは十分考えられるが、岡倉との医師たちの間にどのような交流があったのかは詳らかではない。

しかし、野口の日記を繙くと、観月会に招かれた医師のうち猿田浩太と秋元洗二の名前を見つけることができる。野口は、明治18年に開かれた茨城県人会親睦会の帰路、猿田家を訪問している。一方秋元は、病を患った野口の次女芳が明治37年

4月に入院した秋元医院の院長であった。野口は病院を訪れて秋元と面会し、その後も時間の許す限り芳を見舞っている²⁹。このように、茨城の日本美術院関係者たちと岡倉との接点を探ろうとすると、初期の段階で野口の存在が浮かび上がってくるのである。

おわりに

以上、五浦における日本美術院の受容に際する岡倉の人脈構築と野口勝一の役割について考察してきた。

実質的な岡倉と地域との交流は、野口の紹介状から始まったと言っても過言ではないだろう。美術界における岡倉の活動を理解していた野口は、彼と五浦を結びつける重要な役割を担ったのである。そして岡倉が野口を介して得た地元の人脈は、土地の買収を成功させ、その後地域が日本美術院の五浦移転を受容する礎となった。

岡倉が最終的に日本美術院の移転先を五浦に決めたのは、土地購入以来、地元の人々と交誼を結び、時間をかけてネットワークを拡大してきたことが理由のひとつであったと考えられる。移転した日本美術院の後援活動の中心にいたのは、水戸の「いはらき」新聞社や齋藤隆三、斐の兄弟であった。そして野口は「いはらき」新聞社、齋藤斐、水戸の医師グループともつながりを持っていた。ここから岡倉が、野口と交流関係にある有力者や知識人層に受容される形で、北茨城と水戸とをつなぐ線上に人脈を築いていき、日本美術院の五浦移転を受容する基盤を形成していったことが窺える。

明治39年9月28日「いはらき」新聞は、岡倉が地方に美術院を建設するのは「彼のミレー・コローの如き大家等が巴里市外のバルビゾンより出でて其名声を全世界に轟かしたる事情を実験」するためだ、と報じた。野口は日本美術院移転の前年に死去するが、その役割は、地域に日本美術院

受容の花を咲かせた「種まく人」であったと言えるのではないだろうか。

謝辞

本稿執筆にあたり、新資料の掲載をご快諾くださった野口不二子氏に深く感謝を申し上げます。

付記

本稿は、茨城県北ジオパーク「インタープリター」養成講座（高萩市総合福祉センター、2010年11月6日）での発表をもとに加筆したものである。本研究は、科学研究費補助金・基盤研究(C)「岡倉覚三と日本美術院の五浦移転に関する比較文化史的研究」の助成を受けたものであり、比較日本学教育研究センターのプロジェクト「哲学、倫理、宗教、科学思想に関する比較思想的研究」における近代比較思想史研究会での成果の一部である。

注

- 1 藤本陽子「日本美術院の五浦時代」（『日本美術院史』3巻上、日本美術院、1992年）、後藤末吉「五浦と天心」（『茨城大学五浦美術文化研究所報』10、茨城大学五浦美術文化研究所、1985年）、森田義之・小泉晋弥編『岡倉天心と五浦』（中央公論美術出版、1998年）
- 2 齋藤隆三『日本美術院史』（中央公論出版、1974年、122-124頁）、岡倉一雄『父岡倉天心』（中央公論社、1971年、186-187頁）小泉晋弥氏は、岡倉が福島と茨城で活躍した雪村を好んだことから、同地を訪ねて五浦を選んだのは「五浦・雪村・自由」というイメージの繋がりがあったからではないかと指摘する（「岡倉天心—芸術教育の歩み—」展実行委員会編『いま 天心を語る』東京藝術大学出版会、2010年、164-167頁）。
- 3 後藤前掲論文（26-33頁）
- 4 野口勝一の生涯については森田美比『野口勝一人と生涯』（私家版、2003年）を参照されたい。
- 5 北茨城教育委員会編『北茨城市史別巻8 野口勝一日記VI』（北茨城市、1994年、272-273頁）

- 6 岡倉一雄前掲書（187頁）
- 7 『北茨城市史別巻7 野口勝一日記Ⅲ』（明治22年8月29日の条）
- 8 野口勝一著『画法自在』（博文館、1898年、2頁）
- 9 「観画会に於て」『岡倉天心全集』3（平凡社、1979年、173-178頁）
- 10 『絵画叢誌』11、東洋絵画会叢誌部、1888年、1-3頁。『東洋絵画叢誌』は、明治20年2月から『絵画叢誌』と改題され、第1巻から刊行された。『北茨城市史別巻6 野口勝一日記Ⅱ』（明治21年2月22日の条）
- 11 山口静一『フェノロサー日本文化の宣揚に捧げた一生』上巻（三省堂、1982年、368-370頁）
- 12 『野口勝一日記Ⅲ』（明治24年11月21日の条）
- 13 「青年絵画研究会品評」（『絵画叢誌』57、1891年、2-3頁）
- 14 野口勝一「日本美術院の設立」（『絵画叢誌』139、1898年、1-3頁）
- 15 河北野口勝一著・横山大観画『少年読本第拾編 水戸烈公』（博文館、1899年）
- 16 『野口勝一日記Ⅵ』（明治32年2月18日の条）
- 17 大観の挿絵については、拙稿「茨城県における日本美術院の受容」（『茨城県史研究』94、茨城県立歴史館、2010年、42-44頁）を参照されたい。
- 18 安典久「解説—野口勝一の生涯（1）」（『北茨城市史別巻5 野口勝一日記Ⅰ』、253頁）
- 19 『野口勝一日記Ⅵ』（明治32年1月9日の条）
- 20 『野口勝一日記Ⅵ』（明治37年5月25日の条）
- 21 周山の回想には、岡倉は「磐城の平の附近で景勝の地を世話をしてくれる人」がいたので、まず平を訪れたと記されている。北茨城市立図書館の元司書安部憲夫氏は、岡倉を五浦に連れてきた人物は野口ではないかと推測した（『広報図書館だより』6、北茨城市立図書館、1995年）。福島県に影響力を持つ野口が「景勝の地を世話をしてくれる人」であった可能性はあるが、今のところそれを裏付ける資料等は特定できていない。
- 22 桶谷秀昭訳「茶の本」、（『岡倉天心全集』1、平凡社、1980年、273頁）
- 23 『野口勝一日記Ⅵ』（明治36年12月24日の条）
- 24 『野口勝一日記Ⅰ』（明治18年2月2日の条）
- 25 『野口勝一日記Ⅳ』（明治34年11月25～30日の条）
- 26 藤本前掲論文（468頁）
- 27 茨城新聞社史編さん委員会編『茨城新聞百年史』（茨城新聞社、1992年、120頁）
- 28 「一昨日の五浦観月会」「いはらき」新聞（明治40年9月24日号）
- 29 『野口勝一日記Ⅰ』（明治18年10月17日の条）『野口勝一日記Ⅵ』（明治37年4月2～21日の条）芳は4月21日に秋元病院で死去した。